「白を貸してください」
 — 生活用具の所有と使用をめぐる
 ベンバ女性のマイクロ・ポリティクス —

杉 山 祐 子*

“May I Use Your Mortar?” Micro-Politics of the Bemba Women
 on the Ownership and Usage of Daily Utensils

Yuko Sugiyama**

The Bemba, who live in the woodland in the Northeastern Zambia, are known that they have a unique slash-and-burn cultivation called *citemene* system and a matrilineal society. Also, it is known that they once formed a powerful kingdom under a paramount chief. I have been continuing the human-ecological research of the Bemba since 1983. This paper's aim is to reveal the structural characteristics of the Bemba villages, which are supported by the matrilineal principal, by analyzing the micro-politics of women on the ownership and usage of daily utensils at the village level with women's point of view.

Daily utensils of the Bemba are very simple, and naturefacts are used efficiently. The research on the ownership of the daily utensils of each household in the village revealed that the utensils are always “wanting”. For example, only elder women have mortar and stone pestle, while the younger women do have neither of those. As a result, the borrowing and lending of these utensils takes place frequently in their daily life. There are no liabilities on the material used, nor does the borrower repay anything to the owner. Practically, the rights to use the utensils are shared by the women in the village. It can be thought that the ownership of these things have symbolical connotations rather than practical ones. The increase in things owned by a woman related to her rise in the life stages and therefore tend to symbolize her social rank in the village. This is the reason why the younger women do not have their own utensils.

Borrowing and lending of the utensils becomes a chance for women to make the time for communication and gathering. At the same time, the gathering is a opportunity to exchange information. The house of an elder woman who owns the utensils becomes a place where all the women in the village get together with various information. Consequently elder women are able to grasp the information brought by the women in the village. With this background, together with the traditional authority accompanied in the matrilineal society, the elder women can exercise the political power over the social relationship of all the members in the village including men.

The action of individual women in the “borrow and lend” relations reflects her social rank and social relationship. At the same time, it becomes a way to recognize the relationship

* 筑波大学

** Tsukuba University

with each other. Under such a socio-cultural setting, the whole body of the micro-politics performed by individual women becomes a significant factor to support and move the social and political structure of the village.

目 次

1. はじめに
2. ベンバ族と調査地の概要
3. 問題の所在——チテメネ開墾をめぐる「できごと」
4. ベンバの生活用具
 - (1) 簡素な物質文化
 - (2) 「不足する用具」
5. 用具の貸し借りと女性
 - (1) 貸し借りの場における所有権と使用权
 - (2) ムレンガ・カプリの女性たちと用具配置
 - (3) 女性たちの集い方とその活動
 - (4) 「物の所有」が意味すること
 - (i) 用具の入手
 - (ii) 用具の所有と女性のライフ・ステージ
 - (5) 貸借の場における個々人の動きと社会的位置
6. 結論：「不足する用具」のもとでの社会関係
 - (1) 意志表示の媒体としての用具
 - (2) 「不足する用具」と年長女性の権威、女性のマイクロ・ポリティクス

1. はじめに

1983年以来、私は、ザンビア北東部のウッドランド（乾燥疎開林）帯にすむベンバ族（Bemba）を対象として、生態人類学的調査を続けてきた¹⁾。それは、掛谷誠を研究代表者とする『ウッドランド・プロジェクト』の一端を担うものであった（掛谷・市川, 1983）。

ベンバ族は、リチャーズ（Richards, 1939）の古典的研究によって、人類学的にはよく知られた

部族であるが、とくに、チテメネ・システム(*citemene*²⁾ system)とよばれる独特の焼畑農耕と、母系社会、パラマウント・チーフ (*citimukulu*) を頂点とする強大な王国を形成していたことなどの点が注目されてきた。

私は、これらの諸特徴を結びつける生態人類学的研究を模索すると同時に、現代のベンバ社会への関心も含め、伝統と近代化の狭間に揺れ動く現代アフリカの地域社会の実態把握をも意図して研究を進めてきた。その成果の一部として、これまでに、チテメネ・システムの生態学的特性とベンバの文化・社会との関係 (Kakeya & Sugiyama, 1985)、変容しつつある農業システムの実態とそれをもたらすメカニズム (Kakeya & Sugiyama, 1987) などの問題について報告してきた。

この論稿では、分析の視点を女性の側におく。とくに村レベルでの生活用具の所有と使用に焦点をあて、それをめぐる女性のマイクロ・ポリティクスを明らかにすることを通じ、母系制村落の構造的特質を浮きばりにすることを目的としている。それはまた、これまでの論稿では実態的所与として分析の対象としてきたベンバの村を、その成員間の動的関係の総体として捉え直そうとする方法的な試みでもある。

2. ベンバ族と調査地の概要

ベンバはザンビア国内最大の部族である。ベンバ王国は1人のパラマウント・チーフを頂点とし、2人のシニア・チーフと15人のジュニア・チーフから構成される中央集権的な政治システムをもつとされてきた (Richards, 1940 b)。しかし実際にはロバーツも指摘するように (Roberts, 1973)、各々のチーフ領は自律的であり、分節的構造を強く内包した王国であったといえよう。王国の支配機構は、ザンビアの独立後も政府の行政機構に組み入れられて、現在まで存続している。

ベンバの各集落は、10～60戸と小規模で、母系をたどる親族集団を核として構成されている。後に詳しく検討するように、長期にわたる複雑な婚姻のプロセスが大きな特徴であるが、とくに結婚初期に、妻方居住（uxorilocal residence）と婚資労働（bride-service）の慣行がみられることを、ベンバ社会の基本的性格のひとつとしてあげておきたい。

ベンバの生計はチテメネを中心として成立している。その詳細については別稿で報告したので、ここでは簡単にその特徴を要約するにとどめておきたい（Kakeya & Sugiyama, 1985; Sugiyama, 1987）。

チテメネ・システムの基本的特徴は、開墾の方法と作物の輪作体系にある。開墾にあたっては、男性が木に登り、斧で枝だけを伐採する。伐採した枝の乾燥を待って、女性が伐採地の中央部に運び、円形に積み上げる。これに火入れをして焼畑耕地を造成する。

チテメネには、初年度にキャッサバ、シコクビエ、蔬菜類を播き、次年度、シコクビエを収穫した後にピーナッツを植えつける。3、4年目はキャッサバを必要に応じて順次収穫していく。5年目には、チテメネ内に円形の畝を立ててササゲを播く。これを収穫するとチテメネは放棄され、10～15年にわたる休閑期にはいるのである。

彼らの生計はチテメネに加え、集落付近での小規模な畝立て耕作（*ibala*）やブッシュでの採集・狩猟にも強く依存している。チテメネの作業過程も含めて、その生計活動は明確な性的分業の原理に貫かれている。生計の基本的な単位は、夫婦を核とした世帯（household）である。

図1に、調査の拠点となったムレンガ・カプリ村（Mulenga-Kapuri）の位置を示した。この村は、ムピカ（Mpika）県都の西方、約27kmの所に位置し、週2回の定期バスが通う道路沿いにある。村は1958年に創設された。先代の村長（*mwine-mushi*）であるムレンガ・カプリ氏が出稼ぎ先のコッパーベルトから帰り、兄弟姉妹とその家族を集めてつくった。村の名は彼の名に由来している。

ムレンガ・カプリ氏は1981年に村長の地位を退

図1. ムレンガ・カプリ村の位置

いた。以来、彼の弟がその地位を継承している。

1984年から1985年の間にこの村では、3世帯が離村し、他の3世帯が移入してきた。このほかに、新たに出造り小屋（*mitanda*）を設けて主集落から離れた世帯が1戸あった。また村長の世帯が、新しい集落サイトを設置するために主集落から2kmほど離れたブッシュに家を建て移り住んだ。これは、集落サイト移転の際、村長の世帯が他の世帯に先がけてブッシュに移り住まねばならないというベンバの慣行に従ったものであるが、後述するように、その移転が村長の世帯と他の世帯とのもめごとを契機としている点で興味深い。1984年5月現在で、この村の世帯数は13戸³⁾あり、それらは図2のような親族関係で結ばれている。このうち、世帯No.6とNo.12の夫は多妻婚者で、それぞれ他村にもうひとりの妻をもっている。また、No.2、No.4、No.5の3世帯は寡婦世帯である。

3. 問題の所在——チテメネ開墾をめぐる

「できごと」

1985年4月から7月のあいだに、この村でひとつの「できごと」がもちあがった。1985年の乾期が始まり、焼畑の伐採期がやってきたのに、村の若い夫たちが伐採をしないと申し込んだのである。

図2. ムレンガ・カプリ村の親族構成

「昨年（1984年）のシコクビエは大豊作で、穀物倉も今までにないほど大きなものを作った。それでもシコクビエはあふれるほどだ。あれだけあれば、今年1年くらい伐採しなくても大丈夫だ。食べていける。私たちだって休みたいのだ。」というのが、彼らの言い分であった。これに対して、女性たちはこう主張した。「昨年のシコクビエはとても来年までもたない。今年伐採しなければ、みんな飢えて、空腹のまま眠らなければならないから、ぜひ伐採してほしい。確かに夫はよく働いてくれたけれど、感謝のしるしにシコクビエ酒だって、たくさん造ってあげたではないか！」しかし、若い夫たちは頑として譲らず、家々では連日のように、夫と妻とが言い争っていた。

焼畑の開墾に限らず、ベンバの生計活動では、すべてにきわめて明確な性的分業が貫かれているといってよい。男性は、焼畑の伐採や播種、柵作りのほかは、ほとんど農作業に携わらない。むしろ、狩猟・採集や、小規模な行商などを主としている。これに対して、女性は年間を通じて持続的に農耕にかかわり、伐採以外の農作業のほとんどを担っている。とくに、シコクビエやキャッサバの収穫は女性のみによってなされ、男性は全く関与しない。収穫した作物を含む食物の加工・調理など、消費のプロセスもまた、すべて女性が担っているのである。それゆえ、女性は、世帯内の消費動向や食物の必要量を体験的に把握していると

いってよい。焼畑の伐採をめぐるもめごととは、このような生計活動における男女の分担範囲の違いにもとづいた、消費予測のズレから生じたと考えられる。

こうしたもめごとの際、生計単位である世帯レベルでは、女性、とくに若い妻たちの意見は非常にとおりにくい。男性で、かつ年長者である夫の方が、常に有利な立場にあるからである。しかし、1985年のこの「できごと」の際には、女性の側の意見がとり入れられる結果となった。通常は個別に活動しているようにみえる村の女性たちの間に、ある種の連帯が生まれたためである。

若い妻たちの言い分は、いつのまにか、年長の女性たちのもとに通じた。年長の女性たちは、年長のゆえに社会的な権威を与えられており、また、若い夫たちにとっては、異性の姻戚、あるいは母という、霊的にも強い力をもった畏怖すべき存在である。同時に、実生活のさまざまな側面で若い夫たちの弱味を握っている、無視しがたい存在でもある。

年長女性たちは、若い妻たちからの話を聞くと、みずからの判断で若い夫たちに圧力をかけはじめた。酒の席で冗談まじりに耶喻し、あるときは真剣な顔で説教し、強くはたらきかけを続けた。一方で若い妻たちも、毎日のように伐採を要請する手をゆるめなかった。ついに、若い夫たちは譲歩して、例年よりは小さいながらもチテメネの伐採

をすることになったのである。

このときの女性の連帯は、意図的に組織化されたものでも、形式的に整ったものでもなかった。では、どのようにしてこの連帯が生まれ、彼女たちが望む結果をもたらすことができたのだろうか。その基盤を明らかにするため、次章からは、ベンバの生活用具の所有と使用に注目して分析を進めたい。

4. ベンバの生活用具

(1) 簡素な物質文化

表1に、彼らが日常に使う用具の一覧を示した。ここでみられる用具は、食器から建築用具まで含めて30種類余りで、そのうちでも使用頻度の高い用具は、わずか20種類ほどしかない。つまり、ベンバの物質文化は、ひじょうに簡素であるということが出来る。この簡素な物質文化は、以下に述べる用具利用の3つの特性と結びつくことによって、ベンバの生活を支えているのである。

a) 用具の多目的利用

限られた種類の用具のみによる生活を可能にしているのは、用具の多目的利用である。これを最も顕著にあらわしているのは、斧の利用法であろう。

ベンバの人々にとって、斧は、男性であることや、その誇りの象徴である。男性は肩にひょいと斧をかけ、片手に槍を持ってブッシュに出かける。焼畑の伐採にあたっては、斧を肩にかけたままで巧みに木に登り、足場を決めると手早く枝を伐り落とす。樹高20mほどの高木でも、2、3分のうちにはすべての枝を伐りつくし、再び斧を肩にかけて木から降りてくる。この斧の用法が、ベンバ男性の存在をもっともよく象徴しているといっ

てよい。伐採のほかに、斧は土を掘る道具としても使われる。このときは、柄から刃の部分はずし、それを先端に切り込みを入れた棒にはめこみ、樹皮紐 (*lushishi*) で縛って固定して、シャベルのようにして使う。

斧は、草葺き屋根の整形にも使われる。新しい

表1. 生活用具の種類

用 具	ベンバ名
斧	<i>lisembe</i>
槍	<i>ubwela</i>
銃	<i>mfuti</i>
狩猟用ネット	<i>isumbu</i>
草刈り鎌	<i>cikwakwa</i>
鍬	<i>ulukasu</i>
籠	<i>museke</i>
金 桶	<i>cintini</i>
金 だ ら い	<i>shomeka</i>
浴用金だら	<i>bafa</i>
長 臼	<i>cinkolobondo</i>
臼	<i>libende</i>
た て 杵	<i>mwinsi</i>
す り 石	<i>amabwe</i>
箕	<i>ulupe</i>
ふ る い	<i>sefa</i>
石 油 カ ン	<i>galoni</i>
ドラムカン	<i>ndolamu</i>
ポリタンク	<i>cupa</i>
壺 (土器)	<i>inongo</i>
鍋	<i>mpoto</i>
皿	<i>imbale</i>
木 杓 子	<i>umwinko</i>
ナ イ フ	<i>mwele</i>
フォーク	<i>foloko</i>
スプーン	<i>supuni</i>
布 袋	<i>kasaka</i>
ヨシ製マット	<i>ubutanda</i>
防 水 布	<i>tenti</i>
ほ う き	<i>cifuti, ceswa</i>
座 椅 子	<i>cipuna</i>

草で屋根を葺いたあと、草の先端部に棒切れをあて、斧を軽く打ちつけて不揃いな草丈を切り整える (図3)。

木製の臼 (*libende*) や座椅子 (*cipuna*) (図4) の加工・製作にも斧は不可欠である。

図3. 草葺き屋根の整形

図4. 臼, 座椅子

女性は、キャッサバの皮をむき、ヒョウタン、カボチャの種子などを取り除く調理用具として斧を利用することがある。

1本の斧があれば、彼らは、食物を加工し、家

具を造り、はては草葺き屋根の家屋を建てることもできるのである。

皿や鍋なども、食品を入れる容器や調理用具としての「本来」の利用法に加えて、場合に応じて

容器の蓋や計量器具として使われたりする。道具の多くは複数の機能を与えられ、多目的に利用されているのである。

b) 自然具の頻繁な「使い捨て」利用

ベンバの日常生活では、使い捨て的な自然具の利用が、かなり頻繁にみられる。調理中の女性が鍋の中味をまぜるときには、炉の付近に落ちている堅果のサヤを拾って使い、使用後には捨てる。

魚毒漁や食用イモムシ採集、あるいは狩猟のためにブッシュに泊まりがけで出かけると斧・鍋・ウブワリ (*ubwali*, 練り粥) 用の粉のみを持って行く。目的地に着くと付近の木を切って骨組みを作り、葉の茂っている枝で被って、またたく間にみごとなシェルターを作る。シェルターの中には、葉の茂った枝を幾重にも敷いてマットにする。戸口に葉のついた太い枝を立てかけて扉を作る。調理の際には、小さな蟻塚を炉石として使う。魚やイモムシ、獣を捕獲すると、腐敗を防ぎ、運搬しやすくするため、火をたいて乾燥させる。この乾燥台もまた、付近の木を使って組み立てる。乾燥した獲物は布や樹皮に包み、樹皮紐で縛って運搬する。

c) 用具の使いつくし利用

3才の娘をもつ若い母親が10才になる妹を連れてサツマイモ掘りに出かけたときの観察例が、「使いつくし利用」を示す好例であろう (図5)。往路では、カタンバラ (*katambala*) とよばれる小さな布で頭を覆い、ワンピースを着て、腰には布 (チテンゲ, *citenge*) を巻きつけている。ウエストを布製ベルト (ムシピ, *mushipi*) で縛り、古くなったチテンゲ (別名ンパパ, *mpapa*) を使って3才の娘を背負い、手には鍬を持っている。

焼畑に着いた彼女はさっそくイモ掘りにかかる。掘り終わるとチテメネ内の焼け残った立木から、焦げた樹皮をはぎとり、中にサツマイモを盛る。さらに、その日の副食用にキャッサバの葉とマメを採取し、頭を覆っていたカタンバラをはずして、それらを包む。そして、ムシピを取りはずしてその口を結ぶ。この包みとイモを入れた樹皮、鍬とを妹に預け、彼女は薪集めにかかった。束ねた薪は、ムオンボ (*muombo*, *Brachystegia longifolia*) の若枝を折って取った樹皮紐で縛る。娘の背負い布 (ンパパ) を丸めて頭あてとし、その上に薪の

図5. 「使いつくし利用」の事例

束を乗せる。そして、腰に巻きつけていたチテンゲで娘を背負い、帰路についた。村に帰り着くと、サツマイモを入れた樹皮の容器と薪を縛った樹皮紐は、ともに燃料として利用された。

加工具の使いつくし利用としては、皿の用法をあげることができる。使い古して穴があいた皿は、おもに計量器として用いられる。さらに穴が大きくなると、在来の塩（ムチェレ、*mucele*）をこす、ろ過器として使われ、最後には炉石の上に置く容器受けに利用される。

これらの特徴は常態的な移動性をくりこんだベンバの生活様式と深く結びついているといつてよい。チテメネ・システムが他の焼畑農耕と同様に高い移動性を特徴としていることは別稿で指摘したが（掛谷・杉山，1987），加えて、ブッシュを泊まり歩くこともある狩猟・漁撈・採集も重要な生計活動であり、さらに、母系制や婚資労働などの社会制度も移動性を助長する。人々は、かなり身軽に移動するといえるのであるが、それは最小限の生活用具さえあれば暮らしていけるという生活様式を前提としている。同時に、それが広大なウッドランドの存在に支えられていることも強調しておかなければならない。

(2) 「不足する用具」

ベンバのもつ用具の種類を数えあげれば30種類ほどになるが、世帯単位でみると（表2），それらの用具をすべて備えている世帯はないという、興味深い事実気づく。

それぞれの世帯が所有しているのは、斧・槍・籠・鋏・ナイフなどの狩猟用具、農作業用具のほか、箕・鍋・皿など調理に使う用具である。

一部の世帯に限られているのは、狩猟用の網や先込め銃である。また草刈り鎌（*cikwakwa*）などの特殊な用具もごく一部の世帯にしかない。さらに注目したいことは、臼・杵・すり石・ふるいなどの調理加工の用具を、一部の世帯のみが所有している点である。

網や先込め銃、草刈り鎌などは、特定の用途に限定された道具であり、使われる機会は限られて

いる。これらの道具がなくても、日常生活はなんとか維持できよう。しかしながら、臼や杵、すり石、ふるいなどの用具は、日常生活に欠かすことができない。それらは日々の食事に直結する、最も重要な用具のはずである。

彼らの主食は、つなぎとしてのキャッサバ粉を混合したシコクビエのウブワリ（*ubwali*）である。シコクビエ粉とキャッサバ粉の加工工程と、その際使われる用具を表3に示した。

日々の食事を準備するのは女性の仕事であり、それゆえ彼女らは、毎日、表中の工程のいずれかにたずさわっている。しかも、シコクビエやキャッサバの調理加工に費した時間は、一日の仕事時間の半分近くに達する。こうしたことから、臼・杵・すり石などの調理加工用具がいかに頻繁に使われ、重要であるかがわかる。

このように、日常での使用頻度が高く重要な生活用具が、各世帯ごとに所有されていないのである。つまり、これらの用具は、いわば「不足する状態」にある。それゆえ必然的に、村の女性の間にはそうした用具類の貸し借りが生じることになる。

5. 用具の貸し借りと女性

(1) 貸し借りの場における所有権と使用権

「不足する」状態にある用具類の貸し借りは、実際のところ、毎日きわめて頻繁にみられる。

臼が必要な女性は、「貸してくださいね（*Njashi-meniko, mayo*）」と所有者にことわって臼を使う。しかし、この借り手が臼を使っているときに別の女性が臼を借りに来ると、彼女は所有者にでなく、臼を使っている女性に向かって「貸してくださいね」と言う。臼の所有者でさえ、それを他の女性が使っているときには、その女性に対して「貸してください」と言わねばならない。自分の臼を貸したままになっている相手に対しても、よほどのことがないかぎり、「返してください」とは言わず、「貸してください」という言葉を使う。つまり、使われている用具は、そのとき使っている人の「もの」とみなされているといつてよい。「貸し

表2. 各世帯の所有する用具

用具 \ 世帯	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
斧	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
槍	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
銃		●									
狩猟用ネット		●			●					●	
草刈り鎌			●		●						
鍬	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
籠	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
金 桶	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
金 だ ら い		●	●		●		●				
浴用金だら		●	●	●	●						●
長 臼	●		●								
臼	●		●	●	●	●					
た て 杵	●		●	●	●	●					
す り 石	●	●	●	●	●	●					
箕	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ふ る い	●		●	●	●	●					
石 油 カ ン	●		●								
ドラムカン	●		●			●					
ポリタンク	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●
壺 (土 器)			●		●						
鍋	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
皿	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
木 杓 子	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ナ イ フ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
フ ォ ーク		●	●					●			
ス プ ーン	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カ ッ プ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
布 袋	●	●	●	●		●		●			
ヨシ製マット		●	●		●						
防 水 布				●	●						
は う き	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

てください」と言いさえすれば、誰もが使える。しかも、所有者への気がねは全く必要ない。所有者が、その用具を所有していることによって、優先的な使用権をも保持していることにはならないのである。用具の所有権は明確に認識されている

のであるが、その使用権は、所有権とはっきり分離されているのである。「貸してください」ということは、その用具の使用権を「一時的に譲ってください」という意味あいで行われているようにみえる。

表 3. 食品の加工過程と使用する用具

	加 工 工 程	使 用 す る 道 具
シ コ ク ビ エ	1. 脱 穀	臼, たて杵, 箕
	2. 風 選	箕, 金だら
	3. 製 粉	すり石, 箕, ほうき
キ ャ ッ サ バ	1. 掘り取り	鍬, 籠
	2. 皮 む き	籠, ナイフ
	3. 水晒し, 乾燥	ヨシ製マット, もしくは防水布
	4. 製 粉 (Ⅰ)	臼, たて杵, ふるい, 箕
	5. 製 粉 (Ⅱ)	すり石

借り手の女性が臼を自宅の庭先に運んで仕事をし、また次の借り手が自宅へ運ぶという過程を繰り返すうち、所有者には自分の臼のありかがわからなくなることもある。そんなとき、彼女は大声で叫ぶ。「私の臼はどこ？」すると、集落のあちこちで仕事をしている女性たちが口々に答える。「〇〇さんのところだよ。」「〇〇さんが使っているよ。」また、借り手自身も「私が使っているよ。」と叫び返す。

女性たちは、それぞれが所有している用具ひとつひとつの細かい特徴を熟知しており、実に正確に弁別する。また、濃密な対面関係を基礎とする村社会内部では、女性の一人一人が他者の行動についても十分な情報をもっており、誰の用具が、どこで誰に使われているかを、ほぼ全員が知っている。「AさんがBさんの用具を借りている」という事実は周知のことなので、たとえ借りている期間が長期にわたってもその用具の所在がわからなくなってしまうことはない。

用具の所有者が主張できる権利はきわめて少ない。用具はいわば、女性全員によって共同管理・共同使用されるのが一般的な状況であり、所有者はむしろ、非所有者に対して謙譲な態度を示すことを求められる。用具の貸し借りにおいて、所有者と借り手の間には物質的な負債関係は生じず、

返礼も全くみられない。

また、借りた用具を使用中にこわしてしまった場合でも、借り手は、所有者にただ「こわれてしまったわ (*nācionaika*)。」と言うだけである。これを聞いた所有者は、「こわれてしまったって?!これから私たちは何でシコクビエを搗いたらいいんだろうねぇ!」と大げさに驚くけれども、決して弁償を要求することはない。なぜなら、その用具はまさに「こわれた」のであって、借り手が「こわした」のではないからである。

このように考えてくると、用具の所有権は所有者にとって、実質的な面では利をなさないかにみえる。「不足する用具」とその所有権は、いったい何を意味しているのであろうか。以下の節で、この問題の解明を試みたい。

(2) ムレンガ・カプリの女性たちと用具配置

ここで、ムレンガ・カプリ村の女性たちの社会関係と、彼女たちが所有する用具の配置を明らかにしておきたい。

図6は、この分析の主役となる村の既婚女性を対象とし、その相互の関係を理解するために必要な男性も含めて作成した親族構成図である。

女性たちは、バカランバ (*bakalamba*) とよばれる年長者たちと、バイチェ (*baice*) とよばれる

図6. ムレンガ・カプリ村の女性たち

年少者たちに二分することができる。年長者は孫をもつ女性で、「〇〇ちゃんのおばあさん(Banakulu 〇〇)」と呼称される。年少者はまだ孫がいない世代の人々であり、「〇〇ちゃんのおかあさん(Bana 〇〇)」と呼称される。図中では、A, B, C, D, E, Fの女性がバカランバ(年長者)、G, H, I, J, Kの女性がバイチェ(年少者)とよばれる人々である。

さらに、年長者たちは、ムレンガ・カプリ村の創始者である1と同系・同世代であるC, D, Eと、同系ではあるが第2世代にあたるF、および他村から婚入してきたいわば外来者のA, Bとに三分できる。同様に年少者たちも、村の創始者1と同系であるH, Kと、外来者のG, L, I, Jとに分けられる。

年少者のうち、H, J, Lの世帯と、年長者Eの世帯は、集落から6 kmほど離れたブッシュに出造り小屋(ミタンダ, *mitanda*)を設けている。このため、シコクビエの収穫が最盛期を迎える6月から、焼畑開墾作業の終わる10月中旬まで、主集落を離れ出造り小屋で生活する。

女性たちが所有している調理加工用具を、家屋群の空間配置とあわせて表わしたのが図7である。

すり石をもっているのは、A, B, C, D, Fで、すり石はそれぞれ図示した位置に固定されている。Dのすり石は、1982年に死亡した彼女たち

の母親の所有物であったが、Dがそれを受け継いだ。臼をもっているのは、A, C, D, E, Fである。しかし、Eの臼は出造り小屋に置いたままになっており、本集落にはない。チンコロボンド(*cinkolobomdo*)とよばれる木製の長臼をもっているのは、この村では、A, Cのみである。たて杵は、A, C, E, Fが所有しており、ふるいは、A, C, D, E, Fが所有している。

この結果から明らかなように、臼、すり石、たて杵、ふるいなどの調理用具は、限られた女性が、一組のセットとして所有しているのである。これらの用具の所有者は、村の年長の女性たち、すなわち、A, C, D, E, Fに集中している。これに対して年少の女性たちは、そうした調理加工用具のどれひとつとして所有していない。調理加工用具が「不足」している状態は、年少の女性たちが所有していないために生じていることがわかる。

(3) 女性の集い方とその活動

それぞれの世帯の居住空間は、通常、家屋と炊事場およびそれらを取り囲む前庭(*lubansa*)をセットとした、ひとまとまりの空間をなしている。この空間を、ここでは家屋域とよんでおこう。女性たちは、主としてこの家屋域内、とくに前庭で仕事をすることが多い。臼やすり石などの用具をもたない女性は、それらの所有者のもとを訪れ、

図7. 村の用具配置

通常は、用具を借りてその前庭で仕事をする。それゆえ、用具の貸借をめぐる女性たちの動きは、用具の配置とほぼ対応することになる。

その実態を具体的に考察するために、1984年5月末から6月初旬にかけて任意に観察日を設定し（3日半）、朝7時から夜8時まで、1時間ごと

に、集落内のどの家屋域に誰がいて、何をしていたかをチェックした。ただし、農作業・薪集め・水汲みなど、集落外での活動はカウントしていない。彼女たちがどの家屋域にいたかを集計したのが表4である。

家主の女性と他の女性が共に家屋域内にいた回

表4. 家屋域における女性の集い方（3日半、1984年 5月末 6月初旬）

家 屋 域 集 合 状 態												
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
家主の女性単独（回）	0	21	5	6	6	4	26	6	8	—	—	5
家主の女性と他の女性（回）	0	3	12	13	1	11	0	6	3	—	—	2
他の女性のみ（回）	6	0	4	0	0	0	0	0	0	—	—	0
計（回）	6	24	21	19	7	15	26	12	11	—	—	7

数をみると、C、D、Fが最も多いことがわかる。C、D、Fがそれぞれの家屋域で単独でいた回数はきわめて少ない。それとは対照的に、年少者のGやI、また年長者のB（彼女については後の節で詳しく検討を加える）は、単独でいることが多い。

年長女性のみが、臼やすり石などの用具類を一組のセットとして所有していることはすでに指摘したが、ほぼそれに対応して、C、D、Fの年長女性のもとに女性たちが集う傾向性があるといっているであろう。

ひとつの家屋域に集う女性は、そこでどのような活動をしているのであろうか。その活動内容を示したのが表5である。観察中にその活動内容を確認しえたのべ人数73人のうち、食品加工が27人、談話が38人でこの2つの活動が大部分を占めている。「談話」として類別した事例のなかには、用具を使う順番を待っている例が多いことも指摘しておく必要がある。他方で、「食品加工」の場合も、実際には談話に興じながら作業を進めており、睡眠中の事例を除いて、集う女性たちは常に談話しているといっている。

表5. 女性の活動（他の女性と共にいた場合）

活 動 内 容	のべ人数
食 事	5
食 品 調 理 加 工	27
余 暇 / 睡 眠	3
談 話	38
計	73

年少の女性たちは、用具を借りるために年長女性のもとを訪れ、結果的に仕事を共にする。他の女性が自分の用具を使っているときには、年長女性も他の女性のもとに用具を借りに行き、そこで一緒に作業をすることになる。それゆえ、一つの

家屋域に集うメンバーは固定的ではないのである。そうした女性たちの集いの場では、断えずさまざまな会話が交される。臼・すり石・杵・ふるいなどの「不足する用具」とそれらの貸し借りは、女性たちが集う契機となり、また、会話を通じて情報を交換する機会をも増大させているのである。

(4) 「物の所有」が意味すること

(i) 用具の入手

前に、調理加工用具の「不足」状態は年少の女性がそれらを所有していないことによると述べた。しかし、なぜ彼女たちは、使用頻度が高く、生活に不可欠な用具類を自分でもとうとせずに、他人から借りるのだろうか。

一般的に言って、それらの用具を手に入れるのはそれほどむずかしいことではない。すり石は、遠隔地ではあるが、村から50kmほど離れた山地から素材となる石を取って来さえすれば、女性一人の手ですぐ整えられる。夫に頼めば、臼や杵は斧1本で作ってくれるだろう。程度の差こそあれ、どの男性もそれらを作り上げる技能をもっている。

経済的な側面からみても、それらの用具を購入するのは、それほどむずかしいことではない。臼の製作を他人に依頼すると、約10～15クワチャ（1 Kwachaは約100円、1984年）かかる。杵は、せいぜい3クワチャだという。ふるいは、ムピカのマーケットで5～8クワチャの値段である。ひとつの世帯は、年間少なくとも100クワチャ以上の現金を入手する。現金の多くは、生計維持のために費されてしまうのであるが、それでも臼やふるいの値段は、収入に比して法外とはいえない。また、頻繁に行商に出かけ、現金収入を得ることができる若い男性たちを夫にもつのは年少の女性たちであり、年長の女性たちよりも現金を入手しやすい立場にある。逆に、年長女性の夫たちは、現金収入を得る機会が少ない。また、年長女性のうち3人は寡婦で用具を作る男手をもたず、経済的条件も厳しい。しかし、調理加工用具をセットとして所有しているのは年長女性なのである。

この状況を理解するには、ベンバの女性たちにとって「物を所有すること」がどのような意味を

含んでいるのかを検討しなければならない。

(ii) 用具の所有と女性のライフ・ステージ

ベンバ女性にとっての「物の所有」は、女性のライフ・ステージと深く結びついている。それは、とくに、自分の炉（*ishiko*）や調理用具をもつプロセスに象徴される（表6）。

少女が初潮を迎えると、その母親らは少女に、チスング（*cisungu*）とよばれる成女儀礼の第一段階を施す⁴⁾。この儀礼を経た少女は、土壺を与えられる。この壺は、他人の目にふれないよう、教えを守って管理しなくてはならない。結婚後に、夫と性交渉をもった後の「熱い」身体を「冷やし」て浄化する儀礼にのみ使われる重要な壺だからである。つまり、壺を与えられた女性は、結婚可能な段階に達したとみなされている。この壺はまた、女性の生殖力を象徴しているといってもよい。

婚姻にまつわる儀礼は、その開始から完了にいたるまでいくつかの段階があり、実に10年余の時間を要する。女性が「物を所有する」プロセスに注目してこれらの諸段階を区分すると次のようになる。

①婚約（*kukobeka*）と婚資の支払い、婚資労働の開始：若いカップルの間で結婚の合意ができると、男性は親族の者を仲介に立てて、女性の両

親のもとへ婚資の手付け（ンサラモ、*nsalamo*）を届ける。その場で、婚資の総額が決められる。男性は、いわば「分割払い」で婚資を支払っていくのであるが、同時に焼畑伐採などの婚資労働に従事し始める。女性の村が遠方にある場合には、その村に自分の家を建てて移り住む。しかしこの時点では、女性はその母親のもとに居住し続け、自分の炉をもつことや夫と共に住むことは許されない。彼女は、夫の家の掃除や水汲み、食事の準備などの身の世話をすることだけを許される。しかし、夫用の食事は、母親の炉や用具、母親の穀倉からもってきたシコクビエを使って調理しなければならない。

②夫の家への移住とチスング：半年から1年間①の状態が続いたのち、女性は村の年長女性、あるいは父方叔母によって、母の家から夫の家へと移される。この年長女性はナチンブーサ（*nacinbusa*）とよばれる。ナチンブーサは自宅に少女を招き入れて戸口を閉ざし、少女と2人きりで向かい合って、結婚した女としてなすべき仕事や義務、性に関する知識や作法などを教える。これらを全て終了したのち、少女を布で背負って夫の待つ家に送り届けるのである。この儀礼はチスングの一段階を構成しており、関係者のみでひっそりと進

表6. 女性のライフ・ステージと所有する物の増加

ライフ・ステージ	婚資労働	居 住	食 物	所 有 す る 物				
				土壺	炉	鍋など	穀物倉	臼・杵すり石
1. 初 潮（チスング）		母親の家	母親のシコクビエ	●				
2. 結 婚	開 始	〃	〃	●				
3. 夫の家への移住	+	夫と共	〃	●				
4. 炉の開設	+	〃	〃	●	●	●		
5. クランゴムリロ儀礼	終 了	〃	自分のシコクビエ	●	●	●	●	
6. 自分のイガンダをもつ	娘婿からの婚資労働	〃	〃	●	●	●	●	●

められる。この儀礼から半年ほどすると、婚儀(ウブインガ, *ubwinga*) が催され、成女儀礼を完了した村の女性と親族の女性が参加する公の場でチスングの最終段階を迎える。

この段階にある女性は、夫と居住を共にするが、まだ自分の炉と調理用具をもつことができない。

③炉の開設：母親が炉をもつことを許し、所定の儀礼を終えてはじめて、結婚した女性は自分の炉をもつことができる。まず、母親はニワトリを殺して自分の炉で調理し、その一部をナチンブーサに届ける。残りを娘夫婦のもとに持参して共食する。その後、娘の望む場所に3つの炉石を据えつけ、母親自身が集めてきた薪を燃やしつけて、娘に語りかける。「さあおまえの火だよ。」さらに母親は自分の用具の中から鍋をひとつ選び、娘に与える。この時から、娘は自らの炉の火で煮たきをし、望むならば自分のシコクビエ酒を造ることもできる。調理に必要な木杓子(*mwinko*)や皿なども揃えることができる。

④「完全な」炉へ：こうして若い花嫁は自分の炉と調理用具をもつにいたるのであるが、完全にひとつの世帯として自立するわけではない。この段階では、まだ彼女は母親の焼畑からとれたシコクビエに依存しているからである。さらに、彼女は夫の親世代の親族とアマコ(*amako*)とよばれる忌避関係にあり、彼らの穀倉に近づくことはおろか、彼らが食事をする光景を見ることも固く禁じられている。また、彼女の炉では夫の親が食べる食物を調理することができない。彼女の炉は、まだ母親の家(*ijanda*)に属しており、いわば「不完全な」炉なのである。

彼女の炉が「完全な」炉になるには、第一子誕生後と、第二子あるいは第三子誕生後にそれぞれ1回ずつ、クランゴムリロ儀礼(*kulangomulilo*, 「火を見せること」)が行なわれなければならない。この儀礼時に、夫方と妻方の親族が一堂に会してシコクビエ酒と調理済みの食物を交換し、共食する。こうして夫と妻とは、互いの親族の成員権を得る。この儀礼の終了とはば期を一にして夫の婚資労働が終了し、妻は自分の焼畑や自分の穀倉をもつことができるようになる。

このように、女性が自分のものを所有することは、ライフ・ステージの上昇と対応している。自分の物が増加することは、母親の家への依存度の低下と結びつく。つまり、母親の家からの独立性を意味していることになる。独立した世帯をもつにいたった女性はやがて、自分の孫をもち、バカランバ(年長者)とよばれる、ライフ・ステージの最終段階に達する。この段階にはいると、女性は「自分のイガンダ(*ijanda*, 家)をもつ」、すなわち、自分の直系子孫から成るイガンダの祖となったとみなされ、社会的に高い地位と権威を与えられる。臼、杵、すり石は、そのようにイガンダをもつにいたった女性のステイタス・シンボルである可能性が強く、そのために年長者のみが所有することになっていると考えられるのである。

共時的にみれば、村内での物の所有状態は、それぞれの女性の社会的地位に対応する傾向をもつといえよう。それゆえ、母親の家からの独立性が低い年少の女性が年長の女性と同等の物をもつことは、ベンバ社会の秩序化の原理を無視した、分不相応なことなのである。

ここまで話を進めると、用具の所有状態とその貸借関係は、ベンバの伝統的な社会システムと価値観とにかかわる重要な問題点を含んでいることが明らかにできたであろう。それらの問題をさらに分析するために、次節では用具の貸し借りをめぐる女性たち個々人の動きを検討してみよう。

(5) 貸借の場における個々人の動きと社会的地位

表4で用いたデータと、より一般的な傾向性を確認するために1984年10月中旬に観察したデータ(8日間)を並置し、個人別の動きとして示したのが表7である。表中で、AからFが年長者、GからLが年少者にあたる。女性たちの動きに注目すると、年少者が年長者のもとを訪れている回数が多くその逆はほとんどない(年長者集団と年少者集団とに二分し、両者間の動きについてカイ二乗検定を試みたところ、表7bでは α 水準0.1%で年少者から年長者への訪問が圧倒的に多いことが統計的に有意であった。表7aは例数が少ない

表7 a. 女性の動き（個人別） 1984年 5月末 6月初旬

家屋域 女 性	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	計
A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
B	0	24	1	1	0	0	0	0	0	—	—	0	0	26
C	(4)	1	16	4	1	0	1	0	0	—	—	0	1	28
D	(1)	1	3	19	0	2	0	0	0	—	—	0	0	26
E	0	0	1	3	7	0	0	0	0	—	—	0	0	11
F	(1)	0	2	4	0	15	1	0	0	—		0	0	24
G	0	1	1	0	0	1	26	0	0	—	—	0	0	30
H	0	0	6	7	0	1	0	12	4	—	—	1	0	31
I	0	0	(2)	0	0	4	0	5	11	—	—	1	0	23
J	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K	0	0	0	0	0	7	0	0	0	—	—	0	0	7
L	0	0	(2)	0	0	4	0	2	3	—	—	7	0	18

* ()内は家主の女性が
不在時の訪問を表す

* Mは調査者の家
* Jは出造り小屋にあり、不在

が、 α 水準1%で同様の結果を得た)。これは、用具の貸借をめぐる一般的な動きに対応していると考えてよい。

表7 aで、年少者Kが年長者Fのもとを、年少者Hが年長者Dのもとを7回も訪れていることが注目される。KはFの娘、HはDの娘である。つまり、調理用具の貸借の場においても、母－娘関係のつながりが強いというベンバ社会の特性が反映されている。結果的に、母と娘は同じ場でともに仕事をする機会が多くなる。また、前節で論じたライフ・ステージとの関連でいえば、K、Hともに、母親への依存状態を色濃く残した段階にあると考えられる。

HはCのもとへも6回出かけている。その多くは、母親(D)の用具を他の女性が使用しているため、Cの用具を求めての訪問であった。CはHの

母Dの姉で、Hにとっては「年長の母 (*mayo mukalamba*)」である。この点を考えると、女性の動きには母－娘の直接的な関係だけでなく、母方の叔母とのつながりも深いかかわりをもつと考えるとよいであろう。

年長者の動きに注目してみよう。総じて、彼女たちは年長者同志の間でよく動き回っていることがわかる。基本的な用具を借りる必要がないと思われる年長者にこうした傾向がみられる点は注目すべきであろう。

この村に婚入してきた、いわば外来者である年少者Iは、この村生えぬきのHに比べ、年長者を訪ねる回数が少ない。Fのもとへの4回の訪問と、家主の女性が不在のときに限ってCの家への2回の訪問が記録されたのみである。彼女は結婚してから8年ほど経過しているが、夫の親世代にあた

表7 b. 女性の動き（個人別） 1984年 10月中旬（8日間、酒宴の日は除く）

家屋域 女 性	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	計
A						< 8月に離村>								—
B		60	2	0		4		0	0	0	0	0	0	6 6
C		4	30	20		6		0	0	0	1	0		6 1
D		2	20	36		14		2	0	0	0	0		7 4
E						< 9月に離村>								—
F		1	8	16		48		0	0	0	0	0		7 3
G						< 7月に離村>								—
H		0	12	22		6		14	6	2	0	0		6 2
I		2	(6)	6(4)		20		8	26	0	0	2		7 4
J		0	0	0		5		2	0	10	5	0		2 2
K		0	2	3		16		0	0	4	35	0		6 0
L		1	(8)	(2)		10		4	3	4	0	23		5 5

* ()内は家主の女性が
不在時の訪問を表す

* J, K, Lは隣接村にすることが多い

るC, D, Eたちとアマコ（姻戚忌避）関係にある。そのため, IがC, D, Eらと直接に接する機会はまれである。IがC, D, Eの用具を借りるのは, 彼女たちの不在時か, 他の女性（とくにH）が借りてきた用具を「又借り」するときに限られている。通常は, 姻戚忌避のかからない唯一の年長者であるFから用具を借りることが多い。Fは夫方親族ではあるが, 夫と同じ世代に属するからである。同様のことが年少者Lについてもいえる。つまり, 女性たちの多くが母系をたどる親族関係で結ばれた村に婚入した外来の年少女性は, 夫の親世代の人々との姻戚忌避関係によって, その動きが大きく制約されることになるのである。

以上を総括すれば, 年長者は年少者よりも自由度が高く, 年少者のうちでもその村育ちの女性は, 外来の女性よりも自由度が高い, という社会的な

状況があるといえる。貸借の場における個々人の動きは, それぞれのライフ・ステージと母系的親族関係とに対応した社会的地位と深いかかわりをもっている。

この原則を念頭におけば, 例外的な動きを示す女性の存在がくっきりと浮かびあがってくる。たとえば年長者のうちでも, 観察期間中ずっと不在であったAや, 在村しているにもかかわらずほとんど動きのないB, また年少者では, 姻戚忌避を終えているにもかかわらず他家を訪れることがまれで, また他の女性の訪問もないGの例があげられる。彼女たちは, いずれも他村出身者である。

a) Aの事例: Aは2年ほど前に, 前夫との間に生まれた4人の娘を連れてこの村に嫁いできた。彼女はシコクビエ酒造りにたけ, 極上という評判

をとるその酒は、前村長であった夫が主催する酒宴に不可欠であった。Aと、夫の妹にあたるC、D、Eおよび先妻の娘であるFとの仲は比較的良かったが、自分の連れ子である4人の娘の養育をめぐる夫との間にいさかいが生じた。すでに70才を越えた夫には、4人の娘たちすべてを養うだけの焼畑伐採が困難になっていたためである。

このいさかいは夫との間にとどまらず、夫の弟である現村長や、その妻Bをも巻きこむことになった。さらに、夫に共感的立場をとるC、Dらを批難したために彼女たちとの仲も不安定になり、1984年5月から一時的に村を離れてムピカの親族のもとに滞在していた。3週間ほどのちに彼女は帰村したが、すでに夫との離婚を決意しており、離婚後の居住先まですべて手配済みであった。

ちょうどその頃、シコクビエの収穫が始まっていた。Aは「自分の」シコクビエを収穫するまでは村にとどまると言い、シコクビエの収穫を終えた8月に娘たちを連れ、自分の臼とすり石を持って離村していった。

b) Bの事例：現村長の妻Bは、1982年に結婚してこの村に移り住んできた。1985年1月に、夫の兄であるムレンガ・カプリ氏が大病を患った。彼は妻Aと離別していたので、看病にあたったのは彼の娘であるFと、彼の妹であるC、D、Eらであった。ムレンガ・カプリ氏の病状は悪化し、命が危ぶまれるほどになった。このとき、FおよびC、D、Eらはベンバの伝統に従って静かに病人をみとろうとした。しかしBとその夫(現村長)はC、D、E、Fに相談することなく、50kmほど離れたミッシェンの病院に運び込むための手配を進めていた。病人を病院に運ぶ日の朝、Bおよびその夫と、C、D、Fとの間で激しいいさかいが起きた。しかし、結局、現村長であるBの夫が強引に主張を通し、病人を病院に運び手術を受けさせた。

このできごと以来、それまでも他の女性たちと反目しあう傾向にあったBは、完全に孤立した。そして1985年の3月には、かねてから進めていた新しい集落サイトへの移転計画を名目として、夫

とともに主集落から離れた地区に居住地を設け、そこへ移り住んでいったのである。

c) Gの事例：Gの夫は死者相続 (*ubupyani*) によって、もう1人の妻を得た。Gより年長である彼女はムレンガ・カプリから5kmほど離れた隣村に住んでおり、C、D、Eらの遠縁にあたる。

夫は、ムレンガ・カプリともう1人の妻の住む隣村とを行き来して、それぞれに1つずつのチテメネを伐採していた。ところが隣村の妻のもとに行くことが次第に頻繁になり、1984年にはGのチテメネ伐採を拒否して、事実上離婚した状態になっていた。この結果、他村出身でこの村に親族のいないGはよりどころを失ってしまった。さらに、他世帯とのめめごとが表面化した。とくにEの世帯ともめごとを起こしてから、自分の家からほとんど離れずに過ごすことが多くなった。臼などはFから借りていたが、それも自宅に運んで1人で仕事をするようになっていた。

その上に決定的であったのは、他世帯がこれまでにないほどの豊作に喜んでいる中で、彼女のチテメネのシコクビエが非常な不作だったことである。Gは他の村人が邪術をかけたのではないかと疑い、怖れた。また、新しいシコクビエで造った酒が腐って全く売れず、廃棄処分にしなければならなかったことで、さらに打撃をうけた。このあとGはシコクビエの収穫を急いだ。収穫したシコクビエは穀倉に入れずにすべて精製し、ムピカに住む母親の助けを頼んで少しずつ町に運んで行った。そして、すべてのシコクビエを運び終えた7月のある日、夜逃げをするかのように村を離れたのである。

これらの事例をみると、女性たちが各々の社会的な位置を確立し維持していく上で、母系の親族関係による結びつきが重要な役割を果たしていることがうかがえる。村内にこの基盤をもたない外来の女性たちは、より不安定な条件のもとにある。A、Gの事例は、ちょうど観察時に重なっただけであるが、外来の女性たちが村の中で孤立し、またその関係修復を放棄した状況を如実に示してい

た。彼女たちは他の女性のもとを訪れず、他の女性の訪問も受けない。用具を借りても、他の女性と集うことを忌避していた。つまり、他の女性との接触を最小限にとどめようとしていたといえる。このことは逆に、女性たちの日常的な社会関係がどのようにして維持されているのか、そのメカニズムを浮きぼりにしているともいえる。

臼・すり石などの用具を貸し借りすることは、ベンバの物質文化における伝統的なセッティングの中では必然的なことである。しかし、誰から借り、どこで使用するかは、個々の女性がおかれた社会的状況とそれに対する彼女たち自身の対応によって変わる。用具の借し貸りを通じた女性相互の接触と集いを基礎に日常生活が維持されているからこそ、用具の貸し借りをめぐる動きは、女性たちの社会関係をみごとに反映しているといえるのである。

6. 結論：「不足する用具」のもとでの社会関係

(1) 意志表示の媒体としての用具

「不足する用具」というセッティングは、必然的に用具の貸し借りを生む。貸借という行為は、それ自体では物質的負債関係も生じず、貸し手と借り手は対等である。貸借はむしろ、人と人との接触を生む契機として重要なのである。つまり、貸し借りをするとは、他人との関係性を維持しようとする意志表示でもあるといえる。

たとえば、前節の事例にあげたBは、C、Dらとの対立が深刻化する中で、徐々に自分の臼やふるいを買ひ揃えていった。その結果、離村の3ヶ月前には他の女性から用具を借りることが全くなり、いつも1人きりで仕事をするようになった。他の女性たちはBのそうした様子を見て、彼女の世帯が離村するつもりなのだと確信したのである。

このように、用具は単なる用具ではなく、社会的な関係性を維持する、あるいは断ち切るという、個々人の意志を表示する用具でもある。「貸してくださいね」という表現には、同じ集落で生活す

る相互の親和的な関係性を確認する意味合いが含まれているといえよう。

女性たちの行動には、こうした接触をより頻繁化しようとする、いわば無意識の努力もみられる。たとえば用具を借りたあと、他の女性が仕事をしている場所にそれを持って行き、同じ場で仕事をしようとする。自分の家に用具を運んで行くときには、他の女性が仕事をしている場に立ち寄り、そこでしばし談話に興ずる。何かの都合で顔を合わせる機会のなかった人のもとを「クタンダラ（*kutandala*、散歩すること）」して訪ね、話をする行動も、この文脈の中でより良く理解することができる。彼女たちにとって他人と集い、接触すること、あるいは、それを通じて他人との親和関係を示すことは、日常的な行動様式の不可欠な側面となっているのである。

集いや接触の場にある女性たちは、絶えず何かの話をしている。ここではその詳細は述べないが、話の主題は話し手が体験したその日一日のできごとや、その場に集う人々が目のあたりにしている風景・できごとが選ばれることが多い。話し手は話題の人物になりきって、その一挙一動から心の動きまでを生き生きと表現する。ほとんどすべての発話は直接話法で語られる。その場に居あわせた女性たちは、語られる話題に耳をかたむけるだけでなく、その内容を追体験し、共通体験化しているかにみえる。こうして、互いが直面している状況を切実に認識し、共通理解の基盤が醸成されていく。

(2) 「不足する用具」と年長女性の権威、女性のマикро・ポリティクス

「不足する用具」がつくりだす人と人との接触の機会は、臼やすり石をセットとして占有的にもつ年長女性のもとに、より集中する。さまざまな女性が入れ替わり立ち替わり年長者たちのもとを訪れ、仕事をしながら自分の関心事を話していく。年長の女性たちは往々にして、そのような話を引き出す話術にたけている。こうして年長女性のもとには、村中の女性の経験にもとづく情報が集積する。

年長女性は、村内のできごとや村人それぞれの個性と主張を追体験することによって緻密に把握し、そうした個性の総体としての村という全体性を感じている。このような背景のもとで、彼女たちは、村というミクロな世界の中でどう行動するかを決定する。年長女性は、年長であるがゆえに、伝統的なある種の権威を与えられている。しかしその権威を裏うちし、村というミクロな政治・社会的総体における諸関係を操作しうる力を与えるのは、まさにそうした情報集積力と、それにもとづいた判断である。それゆえ年長女性の権威は、実践的な力となるのである。この意味で、用具を所有することは年長者の権威の象徴であるだけでなく、実際のな力の源泉ともなっているのである。

個々の女性の動きは、それぞれの立場や思わくにと左右され、きわめて状況対応的な側面をもつ。たとえば力をもたない年少女性にとっては、年長女性にいかにかアピールし、その支持を得るかが問題になるであろうし、同時に、他の年少女性との関係調整も必要になる。こうした個別的な動きが同調して女性全体の意志となり、社会的な力を発揮していくプロセスが、2節に掲げたエピソードだったといえよう。

個々の女性は、用具の貸借による日常的な接触を介して、個別に相互関係の調整を試みている。このような努力は、同じコミュニティ内で生活しようとする限り、不断に要求されるものであろう。「不足する用具」というセッティングは、それを必然化すると同時に保証する社会装置でもあるといっていよい。しかし、ひとたび同じコミュニティ内に住むことを断念した場合、「不足する用具」はその意志を表明するのに最も適した装置ともなる。それは、広大なウッドランドの存在を前提とした生活様式や、高い移動性を背景としつつ、不安定性を内包した「村」に共住するベンバが培ってきた特性なのかもしれない。

「不足する用具」を契機として展開する女性たちの動きは、村の政治・社会関係を支え、動かす重要な要因となっている。それは、母系社会における村の特質を如実に示していたといっていよいで

あろう。また同時にそれは、ベンバ社会において「物を所有」することは、財力ではなく、社会関係を表現することであることをも示していたのである。この論稿は、こうしたベンバ社会のもつ特性の一断面を、女性と物とのかかわりから考察しようとする方法論的な試みであった。

謝 辞

この論稿のもとになった資料の一部は、昭和58年度および昭和60年度の文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による調査隊「中央アフリカ・ウッドランド帯における狩猟採集民、農・牧民の社会生態学的研究（研究代表者：掛谷誠）」に参加して得たものである。

現地では、ザンビア大学アフリカ研究所所長のS. Moyo博士、主任研究員のP. Hayward博士、研究協力事務官のI. Mwanza女史をはじめとするスタッフの方々、およびI. R. D. P. ムピカ支部の方々から暖かいご支援をいただいた。また、在ザンビア日本大使館、JOCVルサカ事務所、三菱商事ルサカ事務所など、在ザンビアの日本人の皆様からのさまざまなご助力は調査の支えとなった。

調査を進めるにあたっては、ザンビア調査隊の一員であった京大アフリカ地域研究センターの市川光雄博士、弘前大学の今井一郎氏のご協力とアドバイスを不可欠であったことを記しておきたい。さらに、調査隊の研究代表者であった弘前大学（当時筑波大学）の掛谷誠博士には、調査から執筆段階にいたるまで、きめ細かなご配慮とご指導を賜わった。

記して、心からの感謝の意を表したい。

注

- 1) 現地における調査は、1983年9月～12月、1984年4月～1985年2月、1985年8月～11月の計3回、のべ18ヶ月にわたった。
- 2) ベンバ語は、イタリック体でその綴りを示す。ベンバ語の名詞は、*icitemene*のように、その直後に続く音節の母音を語頭に接辞することが原則であるが、ここでは、慣用的な用法以外は、語頭の接辞母音を除いて記す。また、名詞は原則として単数形で表示する。
- 3) これまでの論文 (Kakeya & Sugiyama, 1985, 1987; 掛谷誠, 1986; Sugiyama, 1987) では、ムレンガ・カブリの世帯数を12としてきたが、この論稿ではNo.13の世帯を加え、総計13戸として記述・分析を進める。それは、1984年にNo.13がムレンガ・カブリの成員としてレジスターされたこと、この世帯の妻がムレンガ・カブリ村の創設者の孫にあたり、村内の女性たちと母系的につながる関係をもっていることを根拠としている。
- 4) リチャーズ (Richards, 1940 a, 1956) に詳しい。

文 献

- 掛谷誠, 1986. 「ザンビアの伝統農耕とその現在—ベンバ族のチテメネ・システムの現況」『国際農林業協力』Vol. 8, No. 4
ア出版会。
- 掛谷誠・市川光雄, 1983. 「ザンビアにおける生態人類学研究上の諸問題—予備調査報告—」『アフリカ研究』23.
- Kakeya, M. and Sugiyama, Y., 1985. "Citemene, Finger Millet and Bemba Culture: A Socio-ecological Study of Slash-and-burn Cultivation in Northeastern Zambia," *African Study Monographs* Supplementary Issue No. 4, Kyoto University.
- 掛谷誠・杉山祐子, 1987. 「中央アフリカ・疎林帯におけるベンバ族の焼畑農耕—チテメネ・システムの諸相—」『象徴と社会の民族学』雄山閣出版。
- Kakeya, M. and Sugiyama, Y., 1987. "Agricultural Change and Its Mechanism in the Bemba Villages of Northeastern Zambia," *African Study Monographs* Supplementary Issue No. 6, Kyoto University.
- Richards, A. I., 1939. *Land, Labour and Diet in Northern Rhodesia*, London, Oxford University Press.
- Richards, A. I., 1940 a. "Bemba Marriage and Present Economic Conditions," *Rhodes-Livingstone Institute Paper*.
- Richards, A. I., 1940 b. "The Political Systems of the Bemba of Northeastern Rhodesia," *African Political Systems* (Fortes and Evans-Prichard, eds.).
- Richards, A. I., 1956. *Cisungu: A Girl's Initiation Ceremony among the Bemba of Zambia*, London, Faber and Faber Ltd.
- Roberts, A., 1973. *A History of the Bemba*, London, Longman Co. Ltd.
- Sugiyama, Y., 1987. "Maintaining a Life of Subsistence in the Bemba Village of Northeastern Zambia," *African Study Monographs* Supplementary Issue No. 6, Kyoto University.